

医療維新

シリーズ 改革進む医学教育 »

医療維新

医学生の実績、データベース化◆福井大学Vol.3

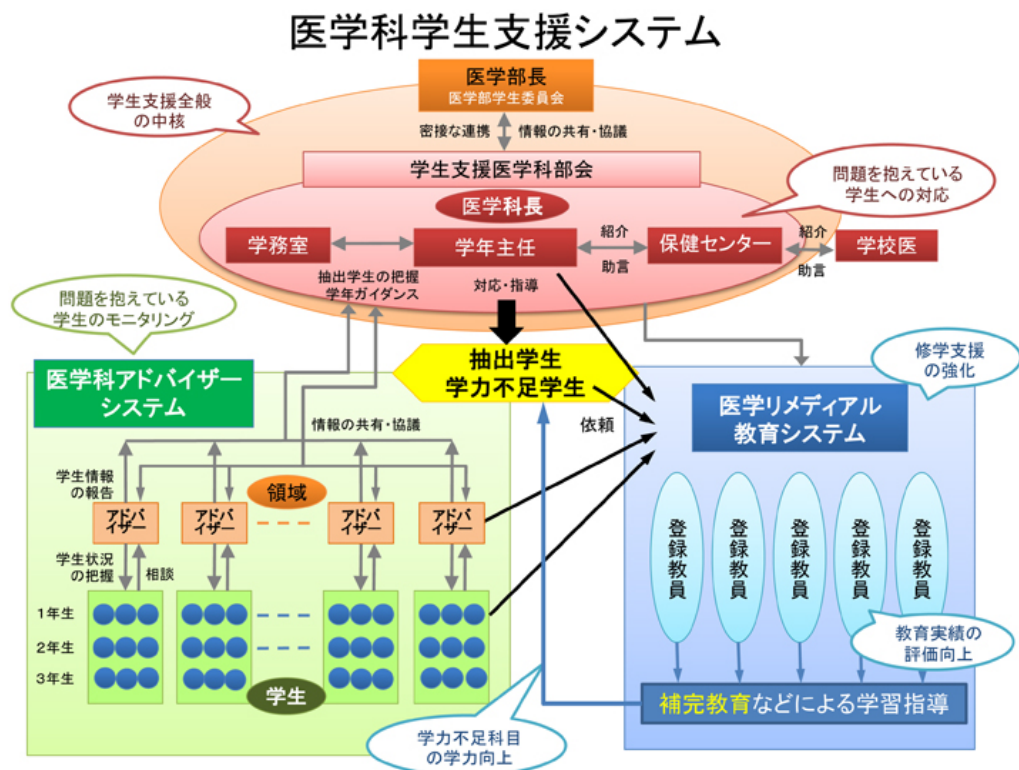
「学生支援システム」で精神・修学両面を支援

スペシャル企画 2016年12月5日(月)配信 橋本佳子 (m3.com編集長)

「医学生の学力低下は、やはり感じている。医学部の定員増の恩恵を受けたのは、旧七帝大か、旧六医学くらいだろう。これらの医学部の定員増により、我々の大学に来ていた成績上位の学生たちが、これらの大学に行くようになってしまった」

福井大学医学部の医学教育改革を進める責任者の一人として、こう語るのは、同大医学部附属教育支援センター長の安倍博氏だ。福井大学でも、医学部の定員は2007年度の90人から、2016年度は110人に増加。2年次からの学士入学を含めると115人に上る。「2023年問題」を控え、診療参加型臨床実習の充実、それに先立ち基礎医学・臨床医学の講義も前倒しになる中、いかに医学生を支援し、モチベーションを高めるかが重要課題になっている。

「教育の屋台骨を作るのが、今の私の役割」と語る安倍氏。同大では、カリキュラムなどの改革と並行して、「医学科学生支援システム」の充実を進めている。特徴は、学生の入試成績から入学後の成績など、各学生のさまざまな基本情報を年次縦断的に蓄積した「学生総合データベース」を作成、それを活用しながら、学生が気軽に相談でき、主に精神面での支援を行う「医学科アドバイザーシステム」と、学習面での支援を行う「医学リメディアル教育システム」を構築、運営している点だ。



福井大学の「医学科学生支援システム」（図提供：安倍氏）

留年、「面接の成績」と関係

「学生総合データベース」は、医学生一人一人について、修学、精神の両面を支援していく際に活用するだけでなく、ビックデータとしても活用できるユニークなシステム。約2年前から稼働させた。

蓄積するデータは、出身高校、入試形態やセンター試験、筆記試験、面接試験の成績、入学時に全員に課す心理検査（UPI）の結果、入学後の成績、所属部活、将来の希望進路など多岐にわたる。入学後の各種データは逐次蓄積しているため、GPA（Grade Point Average、5段階の学生評価方法）の推移を見て、入学当初は成績が良かったものの、低下傾向にある学生を早めに察知し、支援につなげることなどが可能だ。

ビックデータとしての分析も一部、始めている。入試の成績や科目、入学形態などの入学時の情報と、留年との相関を調べると、面接点が低い学生に留年が多いことが分かっている。臨床実習に入る前の共用試験、CBTの成績が悪

い学生は、医師国家試験の模擬試験の点数が低いという相関も見られる。

個人情報である「学生総合データベース」の取り扱いに厳重に注意し、閲覧も限定している。後述の「医学科アドバイザーシステム」のアドバイザーは、担当する医学生のデータのみ閲覧が可能。また依頼があれば、統計的な解析をしてフィードバックすることもある。

「アドバイザー」と「リメディアル教育」が柱

「医学科学生支援システム」の柱の一つは、「医学科アドバイザーシステム」。主たる目的は、医学生の精神的なケアだ。医学生1～3年生が対象で、1学年当たり3、4人に対し、教員一人がアドバイザーとして付く。教員からすれば、計10人前後の医学生を担当する。3年間同じ教員が担当することで、継続的な支援が可能なほか、同じ教員に付いた学生同士が学年を超えて、交流する機会にもなる。

各年次の前期と後期の講義開始前に、個別面談する以外、具体的な関わり方は、各教員に任されている。一緒に昼食を食べたり、臨床系の教授などは研修医も交えた医局の集まりに誘ったりしているという。「メンタル面の支援は、これまで保健センターが行ってきたが、センターに行くまでにはハードルがある。気軽に相談できる存在が、アドバイザー。アドバイザーは、メンタル面の問題を見付ければ、保健センターにつなぐほか、キャリア相談などにも応じている」（安倍氏）。

「医学科学生支援システム」のもう一つの柱が、修学支援としての「リメディアル教育システム」。通常の講義以外に、補完教育に対応できる教員をあらかじめ登録、例えば定期試験の前や、試験に合格点に達せず、再試験するまでの間、補完教育を行う。学生が自ら希望したり、試験を実施した教員が、学力が低い学生に声をかけるほか、学務室が教員と相談して補完教育につなげることもある。教員と学生が一对一、あるいは一对多で行うなど、教育のやり方はさまざま。



福井大学医学部附属教育支援センター長の安倍博氏。

1年生のモチベーション低下にも配慮

安倍氏は、教育支援センター長として、「2023年問題」への対応も担当し、医学教育の国際認証取得に向けて、卒業時アウトカム、コンピテンシーの設定、カリキュラムの見直しなどを進めている（『教育こそ、我々大学人の使命』を参照）。

「従来は、入学時に、『福井大学を卒業すれば、どんな医師になれるのか』『どんな能力を身に付けていれば、卒業できるのか』が定まっておらず、『単位さえ取得していればいい』という状況だった。国際認証の取得に当たって、重要なのは、卒業時アウトカム。つまり卒業時に求められる能力をいかに設定し、評価するかだ」と安倍氏は語る。「日本の大学である以上、卒業時アウトカムとコンピテンシーは、大学による差がそう大きくはない。8割はほぼ共通で、残る2割でいかに福井大学としての特徴を打ち出すか」であり、地域医療のほか、原発立地県という福井県の地域事情を踏まえ、緊急被ばく医療に対応可能な総合医の養成を目指す方針だ。卒業時評価は単位取得状況、臨床実習評価、卒業時臨床試験（仮称）、Post-CC-OSCE（卒業時のOSCE）で実施することを予定。

カリキュラムは、卒業時アウトカムを念頭に再編成しているが、国際認証の取得以外にも、安倍氏が留意している点がある。「入学した時はモチベーションが高いが、一般教養の講義を受けている間に、次第にモチベーションが下がってくる学生が少なくない。哲学、文化人類学、物理や数学など、文化系、理科系を問わず一般教養の講義がメーンのため、『医師を目指してきたのに……』と受け止めてしまうからだ。そのため基礎・臨床の講義を一部、1年生に前倒しするようにした」（安倍氏）。

「医学教育は、大学の他の教育と比べると特殊だが、医学教育ほどやりやすい分野はない。それは他の学部とは異なり、研究者を目指す学生も一部にいるが、ほぼ全てが臨床医を目指すという教育のゴールがはっきりしているからだ」。こう語る安倍氏は、人的リソースが少ない地方大学発の医学教育改革に挑む。

【掲載スケジュール】

Vol.1 「教育こそ、我々大学人の使命」

Vol.2 臨床実習、「学生用電子カルテ」も用意

Vol.3 医学生の成績、データベース化

シリーズ [改革進む医学教育](#) »